

加藤紘一氏（元大平内閣官房副長官）に聞く

大平内閣の理想と実態

―聞き手・泉 宏・田勢康宏



トルドー・カナダ首相との首脳会談を終えて迎賓館の前の庭園を散策する大平首相と加藤官房副長官（オタワにて・1980年5月5日）

大平派の一期生となる経緯

——まず大平さんとの出会い、そして大平派から出馬して、大平派の一期生になるわけですが。

加藤 私が大平派ということ考えたのは、まだ昭和四〇年（一九六五年）代の後半、外務省で中国課の課長補佐をしていた時に、次は自分が立つということが地元と家族の中で決まったもので……。それで、いろんな選択があつたのだけれども、父が亡くなつたあと結婚した時の仲人兼親代わりみたいなことをしてくれたのが、灘尾弘吉さん夫妻で、当然、それが考えられたんだけれども。日中関係の政策を担当していた課長補佐だったもんで、それぞれの政治家の発言録を見ると、大平さんが一番よく中国問題を考えていて、深い人だなあと何となく憧れたんですね。それで人を介して紹介状を書いてもらい、「入門させてもらいたい」といって大平さんと会つたのが、宏池会の会長室です。その紹介状は法眼晋作先輩でした。当時、福田（赴夫）外務大臣だったもんですから……。

——大平さんにはそれまで、全然、会つたことはないのですか。

加藤 大平さんには一回、会つたことがあつた。というよりも見たことがあつた。それは、その法眼さん（外務省の欧亜局審議官をしてた）の長男の俊作君が僕の親友で自殺するんだけれども、難友会館で行われた葬儀、これは昭和三九年の六月頃、行われたんだが、大平外務大臣と法眼氏との関係もあつて喪主の友人代表みたいにして、大平さんが弔辞を読みましたよ。で、亡くなつた俊作君の友人代表が僕。そこで二人が弔辞を読んでたというのが、ありましたけどもね。それは会つたことにはならない。それで、よく亡くなつた法眼から大平さんの家と自分は遠い遠い親戚なんだなんて自

慢気な話を聞いていた。そんなこともあって、お父さんの法眼さんに頼んだということです。

——最初、会った時は、大平さんは加藤さんにどんな感じで接しられたのですか。

加藤 「あー、よく考えておく」みたいなことだったね。よくくる（政治家志望の）ワン・ノブ・ゼムみたいな……。それから暫くして、あんまり返事がこないから、田中六助さんが当時、大蔵政務次官で、妹尾さんという人が外務省にいましてね、田中六助外務政務次官の時の秘書官が何かしていたのかな、遠い親戚か何か。で、隣の課の課長をしてたもんだから、妹尾さんが六さんを紹介してくれて、そして六さんに大蔵政務次官室に会いに行ったら、「分かった」と言っていて、「じゃ、とに角、はつきりさせよう」みたいなことを言っていて。それで二度目に大平さんに会いに行ったら、「そうか、決心変わっていないんだな」と。要するにテスト期間だったのでしようね。それで「身体は丈夫か、金はあるか」なんて言われました。でも「身体は丈夫ですけれども、金はどうでしょうか」なんて言っていて……。「うー」と、うなずいていましたけども。「そこまで政治をやる決意が変わらないなら、じゃ一緒に苦勞しようか」と言っていて、握手してくれました。

——それから選挙があつて、初当選されますね。

加藤 それがね、昭和四六年一二月に私は外務省を辞めて、翌年の選挙までびったり丸一年。見通しが良かったなと思つてるけど。それで一番最初は、四七年の三月か四月に大平さんが議員生活二〇周年という記念に選挙区に行つてガーツとキャンペーンをやるんですよ。演説会をずうーとやつて行くわけ。その時は派閥を引き受けた直後だよ。その時に秘書の真鍋（賢二）さんが大平さんの選挙区にきて、「各市町村を廻る時の前座をやりながら演説の勉強をしたら」と言われて、一〇〇〇人、

実 二〇〇〇人の前で喋るといふのを初めて僕は経験していくわけです。その晩に高松の川六（旅館）に泊まるんだけど、翌朝になったら大平さんの部屋に呼ばれて、五〇万円もらいましたよ。

華 — 演説に対する評価はなかった？

去 加藤 演説に対する評価はなかったな。聞いてないもの、彼は一番最初の前座の前座でやっけて行くわけだから。ただ憶えているのは、ある会場で、演説が終わってから待っていたら、大平さんが入ってきて、「君、次の会場へ行かないと、順番が間に合わないんじゃないか」とか言うもんだから、大物政治家もこんな細かいスケジュールのことまで考えてんだなあ、繊細なもんだなあ、選挙区のことだと真剣なのかなと思ったのが印象的ですな。

— 加藤さんが二回目の当選をされた後に、党総裁選に大平さんがチャレンジするわけですな。

総裁予備選での有名なエピソード

加藤 昭和五十一年に私は二回目の当選をする。それで、五三年に大平さんは自民党総裁選の予備選挙で勝つ。

— その予備選挙の時、大平さんはあと開票まで何日という時に、「俺は勝った、絶対、勝てる」といふことをおっしゃったのが、すごく記憶に残っているのですが、加藤さんはその時はどういふふうに見ておられましたか。

加藤 いやー、非常に自信満々に駒を進めていたように思いますよ。でも、それは表情で見てるだ

けで、言葉としては聞いてないです。それから、詳しいことは当然、当選二回目の私は存じません。

——その経過でだいぶ有名になってますが、改めて「植村直己さんの犬橋」の話をお聞きします。

加藤 予備選は各県ごとの開票で、そこで勝つとその県の特徴を全部取るというヤツで、山形県は良くても「七対五」までしかいけなくて負けるだろう、と言われていたと思うんですね。成績がすぐ分かるわけだから、必死になって田舎で電話を掛けまくったり、いろんな作業をしていると、やっぱり東京にも出て見たくなるのです、二週間も田舎にいます。宏池会に行くと、ガランとして誰もいない。そのとき事務局長の木村（貢）さんが誰かが、「やつぱり、あんまり東京へこないほうがいいですよ」と、「田舎でやってたほうが……」というようなことを言ったのを思い出す。で、その日、瓦（力）さん（現、防衛庁長官）と一緒にだったと思うけども、瀬田の家に行く。すると、大平さんが「いやいま、俺は植村直己君のパーティーに行つて挨拶してきたが、面白いことを植村君、演説しているんだよな。『北極圏で長い間、犬橋で、一〇数頭の犬を使っていると、一匹一匹の個性が見えてくる』と言つんだよなあ。ある犬は何も引いていないように見えるけど、実際はよく引いている。ある犬はもの凄く一生懸命引いているように見えるけど、実際は引いていない。犬も一匹一匹が見えるんだよねえ」と、言うんだよね。途端に、瓦さんと私はですね、「それぞれの選挙区へ帰つて、必死に働こう」と言つて、一目散に選挙区に帰るんだけども。なかなかシビアーなお人だったと思うね。

——派閥の領袖は、それでなければ……。

加藤 領袖はそれぐらい温かく、なおかつシビアーに、公正に子分を見てんだな」と。

——そういう総裁予備選を戦い抜いて、福田さんが「天の声にもたまには変な声がある」と言つて、

実 本選を辞退された。それで大平内閣ができて、その内閣で加藤さんは、今日に至る最初の一步である
就（内閣）官房副長官に指名されるわけですけど、その経過は、加藤さん自身はどういうふうで大平さ
んから説明を受けましたか。

去 加藤 受けてないです。直前まで林義郎さんがなるはずだったんだよね。

——全然、説明は受けてない。どういってお気持ちでしたか。

加藤 「えーっ」という感じで……。 （大平さんから説明は）全然なかった。ただ、組閣の後、官
房副長官も、執務室に呼ばれて、「田中（六助）官房長官を助けて、しっかりやってくれ」と言われ
ただけだよな。

——冷たいなと思わなかったのですか。

加藤 思わない。思うどころか、僕でいいんだろうかと……。

——だけど、予測の範囲内には入ってたんですね。

加藤 僕が？。年がまだ若かったんだよね。

——それで第一次大平内閣の組閣では、鈴木善幸幹事長、伊東正義官房長官という説が有力で、し
かし、結果は斎藤邦吉幹事長、田中六助官房長官となった。あの辺の経過については、大平さんから
説明を受けたこともないですか。

加藤 ないです。

——どついうふうに見ておられましたか。

加藤 いや、鈴木さんは働き過ぎだから福田派などから憎まれたんだなあと、思いましたよ。

——田中六助さんの官房長官については？

加藤 それはよく知らない。ただ、伊東さんがいなくなった、国会に現れなくなった、ということは大平さんの周辺が言つてたのは憶えているよ。自宅にいたんだつてね。

——それで大平内閣がスタートしましたが、大平さんは解散戦略をどう考えておられたんですか。加藤 そこは全く憶えてないんです。

——解散について、大平総理と加藤さんの間で、何か話し合いをしたことは……。

加藤 全くありません。

——実際に解散したのはその次の年の秋ですね、一〇月七日投票になつたわけですが、あの時、自民党が負けた理由の非常に大きな一つとして、一般消費税があつた。あれは、総理の番記者との話からボンと出て、燎原の火のように反対運動が巻き起こつて、そして選挙の途中で撤回するという経過でしたが、どういうふうに記憶されていますか。

消費税にかける大平総理の執念

加藤 よく憶えてないですね。ただ大平さんが打ち出して、しかし打ち出した以上もの凄い反撃はあつたけれども、少なくとも大平周辺の七人衆みたいな者は最後まで言い続けようという会話が周辺で行われていました。

——七人衆とは？

加藤 まあ、斎藤幹事長とか、田中官房長官だとか、金子（一平）大蔵大臣だとか私だとか……。

実ただ、選挙の間にも閣議があつて、それで東京へ出てきたわけですよ。私は三回目の選挙だったんだけれども、生意気にも選挙の半分ぐらいは人の応援に行つていたんです。肩書きが副長官だったもんだから。で、応援とか自分の選挙区の合い間に官邸にきて閣議に出たら、終わった段階で、まだ丸いテーブルにいる大平さんの所に金子さんが近づいて、何か深刻そうに、言いにくそうに、ポソポソと喋つてましたよ。そしたら、大平さんが「君がそんなことでどうする。選挙は勝ちます。堂々とやるんです」みたいなことを言つてた。金子さんは「一般消費税を引つ込めたらどうですか」と言つたんだと思う。これに対して、怒気を含んで大平さんが説教してたのをよく憶えています。

——しかし、撤回しますよね。それも、かなりギリギリになつてから。
加藤 ギリギリです。

——撤回する時は、副長官にも、お話は何もなかつたんですか。

加藤 もちろんないです。（私が）東京にいないもの。

——結果的には天気も悪くて選挙に大敗する。それからが四十日抗争の始まりということなんですけどもね、大平さんが一瞬、辞めるといふ意思を示された。しかし、それは周りの説得で撤回した、という話を聞いたんですが。

加藤 それは知りませんね。伊東（正義）さんと木村（貢）さんが、その弱気の真意を聞いて、それを巻き直したという話を、どっかから聞きましたけど。そこは僕は知りません。

——結局、大平さんは「辞めない」ということで実力者会談になつて、最後の天王山はやはり大平・福田会談で……。

福田・大平会談後の福田さんへの評価

加藤　そうです。何回かやりましたね。

——「僕は神、君はキリストだ」(福田氏)、「私に辞めるといふのは死ねということか」(大平氏)という有名なやりとりがあったわけですが、その後の大平さんと加藤さんとの会話で「俺が辞めたら次は……」というのも一部では知られていますが……。

加藤　そう。大平さんが福田さんと会談して帰ってきた後、官邸で僕の記憶じゃ遅めの昼食を食べていたように思うんですね、小食堂で。

——お二人だけでですか。

加藤　二人だけですな、ほぼ。端じつこのほうに誰か秘書官がいたような記憶があるけど……。その時に大平さんが「福田は俺に辞めると言った。しかし、俺が辞めた後は、どうするんだ。それを考えると、俺にはなあ、加藤、辞める自由がないんだ。もう、いいよ、総理になつたんだから、いつ辞めても。しかし、その後を考えなきゃならん。辞める自由がない」と。暫くして「俺が辞めたら、誰が総理になるべきなのか、加藤、言ってみる」と(言われた)。で、僕は答えられずに下を向いていゝる。すると暫くして、「加藤」と一言って怒鳴られて、目を爛々と輝かした大平さんが「加藤、言ってみる」と、また迫ってくるわけ。ますます俺、下向いちゃうわけ、答えられないから。異常な迫力で、多分、俺にじゃなくて、自分に言ってるんだらうね。「いいか」と暫くして、「俺が辞めたならば、この国のために、総理にさせなければならんのは、福田だ」と言つたんで、(私は)「えーっ」と思っ

実て、耳を疑うわけですよ。大平さんはそつと「国のためには福田だ」と、もう一回、呟くんですよ。就 俺は「大蔵省のOB意識って、こんなものかなあ」というふうに思ったけれども。そのうち、あつ、華 これは違つんだと。総理になつた人間、なる人間というのは、ちよつとやっぱ常人では考えられない発想を持つたろうし、それがリーダーというものなんだろうなあと思つて、まあ考え込んでしまつた時がありましたけどね。

——しかし結局、四十日抗争の行き着くところは、自民党が二つに割れて、大福決戦の分裂首相指名選挙ということになるわけですね。

加藤 そうね。その過程の中で別の日だつたと思うけども、「いいか加藤、日本では総理大臣は他の人から辞めろと言つても、辞めさせられないんだ。総理自身が決心を強くもつて微動だにしなければ、誰も辞めさせられないんだ。誰が去つても、いいか加藤、お前が去つて行つても、俺一人で辞めないで見せる。そういうもんなんだ、総理というのは」と言つて、頑張つちまうんですよ。

——まあ、しかし最後は非常にきわどい票差でしたよね。あの時の大平さんの表情や会話で、何か記憶に残るものはありますか。

加藤 いや、特に憶えていることはないが、とにかく非常に辛そうでしたよ。

——あの時に、新自由クラブ（河野洋平代表）の取り込み工作がありましたか……。

加藤 よく憶えてないですね。

——大平さんと河野洋平さんは、何となくウマが合わなかつたという印象が残っているんですが。

加藤 あんまり大平さんという人は、牛尾さん（治朗・ウシオ電機社長）とか河野さんとかという

人を好きじゃなかったですな。

——その一年前の都知事選の候補選びでも、大平さんが検査入院されているところに、河野さんが牛尾さんを連れて行かれて、その後、河野さんが牛尾さんを（大平さんも）出すんだと思い違いをしたという事件もありましたが……。

加藤 要するに波長が合わないんじゃないでしょうかね。比較的、短期イッシュュー（争点）に、迅速反応型でしょう、河野さんは。大平さんはジックリ型だから。だから、あの時は、（新自由クとの交渉は）田中六助さんが誰かがやっていたんじゃないですかね。

——とに角、ギリギリで（大平さんが）勝って、伊東さんが官房長官にられましたな。伊東さんと大平さんの関係、それから田中六助さんと大平さんとの関係というのは、どんな感じでしたか。

田中長官と伊東長官との違い

加藤 うーん、政権運営は変わりましたね。六さんは、大平さんの言っていることを、よく理解しなかったところがあって、それで、これは言っていないのかどうか知らないけれども、官房長官になってしばらくして、大平さんの発言の真意を、田中長官が喋ったりするんだけど、これがテレコ、テレコになって行くんですよ。私からみても、「あれっ、これは総理の真意を分かかってないんじゃないかな」と思ったときが、だいぶありました。

——具体的には、どんなことが……。

実 加藤 よくは憶えてないんだけども、外交問題もあつたと思うし、政策マターなんかですよ。政策局については、そう違つてなかつたかも知れないけれども……。

華 — 田中官房長官は政局偏重だつたんじゃないですか。

去 加藤 そうそう。私はどちらかというところ、外交とか政策とかで見ていたから。「あれっ」と。そういう面からいえば、政策のほうから押していくと、こんな政局観を言つたりしないはずなのにと思ふようなことがあつて……。しばらくしたら、私は議員会館にいた総理秘書の真鍋（賢二）さんから、「ちよつと瀬田の大平邸に来てほしい」と言われた。行きましたら、総理は私の前で、所信を三〇分ぐらいかけて繰り返すんですよ。それで、要するに、このラインでちよつとあちらこちらに、バックグラウンドのプリーフィングをしてくれという意味らしかつたですね、何となく。それで真鍋さんも、そう言えないから、「総理は副長官にもうちよつと前面に出て、メディア対応をしてほしいという気持ちがある」ということを示唆するわけですね。で、そういうしているうちに、僕が官房長官の発言を訂正することが、しよつちゅう出てきた。

— ありましたね、春になつたぐらいから……。

加藤 そう、春になつたぐらい。三月、四月。それは、あまりにも総理の意図と違ふからね。それは、外遊のタイミングだとか何だとか、そんなこともいっぱいあつたんですよ。そういうしているうちに、官房長官が僕をね、なんとなく面白くないような気分になつて……。そこで私は、成田空港問題に集中するんですよ。つまりある日、大平さんが僕に前の福田内閣では事務官房副長官の道正（邦彦）氏がやっていたことだが と、言つんです。「成田空港の反対同盟と秘密交渉して、成田問題

を何とか早く解決させたい」と。「四元義隆という政界の黒幕的な人、右翼ではないのだがナシヨナリストみたいなのがいて、この人と会って話を進めてみてくれんか」ということを言われて、それから僕は反対同盟の青年行動隊長だとか幹部と、一五、一六回にわたって秘密交渉をしながら、ある案文をまとめて行くのを必死にやるわけです。それは、成田の反対同盟が政治的解決を求めたということもあるし、重要な空港であって、官邸が乗り出さなきゃ駄目だったということもあるんです。一方は、田中六さんとあんまりぶつかりたくない、と。仕事をすりゃぶつかる、という思いもあつたですね。それが伊東正義官房長官になつたら、お父さんとお母さんと息子のような間柄なので、一言でツーカーと仕事が進んで行くような、楽しさと明るさと効率の良さがあつたね。

——第二次大平内閣というのは、大平さんにとっては非常に自分の身辺を固めた内閣だったわけですけども、結局、それから半年経たずに、ああいう形で同日選挙ということになつて行く。その同日選挙に至る経過で、国会が非常に不安定な状況の中で、アメリカ、メキシコ、カナダに行つて、それからユーゴのチトー大統領の葬儀に出席してという、非常に長い外遊がありました。あの時に、大平・カーター会談がありました、どんな会談でしたか。

大平・カーター会議で、「日米同盟」が……

加藤 あの時の大平訪米は、大統領がイランの米大使館人質救出作戦の失敗後、初めて西側の主要国の首脳に会うケースだったんですね。で、大平さんは、「われわれ日本としては、同盟国として、

あらゆる支援を惜しまない。だから、あまり拙速に武力行使には到らないように自粛してほしい」と、間違ひ、失敗した息子を諭すみたいな雰囲気話しておられましたね。で、それを終わって、プリーフィングの時に、同行記者団と私がワシントンに残った。大平さんはメキシコに日程があつて先に行った。それで、その時に、一つはアメリカ側のレストン・ジョーダンと言つたかな、プレス係の秘書と話した。彼のオフィスに大河原（良雄）大使を連れて一緒に行つたのだつたかな。向こうは、「武力行使にならないようにつてなことは、言わないでくれ」と言う。ということは「日本からも武力行使、ヘリコプターを派遣することは、間違ひだと言われたことになるんで、大統領の国内的な政治威信にかかわる」と言つただけで、私は「日本の総理が言つた以上、われわれは言つ」と押し切るわけですよ。

——「日米同盟」ということも、初めて言いましたね。

加藤 一方、逆の面で、「同盟国の一員」という言葉というのは、それまで全方位、国連中心主義と言つて、西側同盟国の行動を採りながら、そこを明言し得なかつた日本外交が、初めてパシツと言つちやつたことになる。「日米同盟」という言葉を言つたわけで、それで私もよっぽど考えたんだけども、「大平さんは同盟国として協力するから、武力行使には慎重であるべしと言つた」と。このポイントを言つたわけですね。その後、メキシコに追っかけて行って、「こういうプリーフィングをしました」と言つたら、大平さんは「えっ、お前、それ言つちやつたのか」と言つただけども、それはカーターの武力行使に文句をつけたということではなくて、同盟国という言葉なんだけども。「あれ、言いました」と言つたら、しばらく考えて、「まあ、いいだろつ」と、こう言つわけですね。何

故、私がそう言ったかという、同盟国という立場を明確にしようかどうか、官邸の中でだいぶ議論があつてね、アフガン、イラン事件の後。当時、西欧諸国の中で、団結、同盟、西側同盟ということ、を明確に言つてなかつたから、ソ連が間違えてアフガン侵攻をしたんじゃないか、という思いがあつたものだから、新聞にブリーフしちゃつたんですけどね。特に佐藤嘉恭秘書官が訪米前、官房副長官室にきて、「外務省および総理の間の空気は、こういうことです」と、(ブリーファの私を)洗脳して帰りましたよね(笑い)。そんな形でアメリカへ行くもんだから、そういうブリーフィングをとつたの判断でしちやつたんだけど。まあ、それが後々ね、二つの事件が起こるんだね。帰りの飛行機の中で、「同盟国として」という言葉を使ったということで、国正(武重)同行記者団長の朝日新聞だけは記事を書くんだけども。(それで)終わっちゃうわけよ。まあ、大平さんとカーターの力関係が、外交的には大平さんのほうが上だという位置づけがあつたもんだから。それが翌年だと、鈴木・レーガンになると、伊東(正義外相の)辞任にまで発展しちゃう。

——カーター大統領との関係は、深いものがありましたね。

加藤 それで、その後、メキシコからカナダに行つて、迎賓館の前にイギリス総督の庭園があつて、そこをちよつと大平さんなんかと散歩する時間があつたんです。いまでも僕の議員会館の部屋に写真があるんだけども。で、ぶらぶらと燦々と輝く日差しがいい庭園を歩きながら、大平さんが「加藤、お前なんかは、カーターに対してもっと厳しく失敗の責任を追及したり、厳しく言え、という顔をしてる。しかし、アメリカは世界の指導者を、いま一生懸命やっているんだ。ドイツ、日本にやれと言われてできるか、できない。やるとしたら、大変なエネルギーと金もかかり、神経も使うんだ。や

実
れない以上、やってる国をな、少しいるんなことがあっても、目をつぶって応援して行く、というのが筋じゃないか。君らの時代になったら、別の外交をやりなさい。いまは、俺はそうするのがいいと思つてやるよ。まあなあー」と言っていました。だから、そういう心情がカーター大統領にも通じたと思う。しばらくして大平さんが亡くなると、現職のアメリカ大統領が葬儀にきて、大平家に（志げ子）未亡人を弔問に訪れる、という布石になるんですね。やっぱり、言うこと、やる政策と、それから人間的に相手の人格を認めながら、弱い時には助けるといふ、そんなものは「ロン・ヤス」と呼ぶ合つとかといふことではなくて、いちいち話し合わないでもすむ個人的な信頼感が、あそこにあつたんじゃないでしょうか。

——大平さんの外交姿勢というものの、首脳外交というのをどういふふうに考えているかということも、そこに現れていると感じますか。

加藤 現れているという感じがしますね。

——それから、メキシコからカナダへ行つて、それでチトー大統領が亡くなられて、ヨーロッパへ飛ぶわけですけれども、その間に大平総理自身は早く帰りがつていたといふ話を聞いたんですが。

メキシコでは心身ともにひどく疲労

加藤 カナダのオタワの迎賓館に入っていた時かなあ、広い部屋で一〇人が一五人が大平総理を中心にソファーに腰をかけていた。「今日の会談はどうであった」とかの勉強会を終わつて、役所の

人にちょっと出てもらったのかな、それでも一〇人ぐらいがいる中で、チトーが死んだ、どうしようかという時に、大平さんは日本に帰りたかったんだよね。それで、後で聞くと森田（一）秘書官に「いろいろ国内もざわついているし……」ということを言ったらしいんだけど。その後、僕も入ってユーゴに行くかどうかについて議論した時に、「副長官どう思うか」と言うから、「私は伊東官房長官と連絡を取りました。伊東さんは総理の身体のことがあるから強くは言えないけれども、無理でなければ、ユーゴに行ってもらいたい、という判断でした。それに副長官の私としても思うのですが、ちょうど国会の本会議が予定されています。帰って本会議に出ている時に、諸外国の首脳がみんなベオグラードに向けて飛行機の中に乗って向かっているという図柄になります。これは、（外交的には）決していることではないと思う。総理のお身体のことがありますが……」と言ったら、「いや、身体は大丈夫だ。じゃ行こう」と。ここで決まっちゃったんです。

——その時は、周りから見ても、お身体がちょっと疲れている、ということはあるのですか。

加藤 ないですね。ただ、メキシコでは疲れた感じでした。あれはね、現地の判断ミスで、原油がもっと貰えることになっていたので（騙された）。それで、深夜、大使館も入れて、午前一時頃まで会議をしていた、翌日の首脳会談に備えて、で、（メキシコは）空気が薄いんだよね、三〇〇〇メートルの高地ですからね。それで、かなり大平さんが苦しうでした。だから、オタワに行った時は、楽そうでしたよ。それから、ユーゴに行つて、チトーの葬儀に出たんですが、段取りが悪いもんだから、迎いの車を待つのに四〇、五〇分立っていたり。そこから埋葬地へ行つて帰る時に、また車を待たされた。こんなちっちゃな折りたたみの椅子を秘書官が持つて行って、大平さんに座つて下さいと

実 言つたんだけど、大きな身体で無理なので、僕がちよつと見たら昔の館があつたので、そのゆつた
就 りした椅子を借りて、スケジュールを待つていたんだけど。まあ、あれも疲れさせたかなあとと思つ
てね。

去 — その後、帰国されたのが五月一日。野党が不信任案を提出するぞというのが、三日後の五月
一四日、その時に四十日抗争でぶつかつた反主流の勢力が欠席するぞ、という話になりますね。あの
時の大平さんというのは、どういふ心境で国会乗り切りを考えておられたんでしょうか。帰つてから
解散決定まで僅か五日しかないんですね。

不信任案可決は不本意なシナリオ

加藤 私は帰ってきて鈴木善幸さん（総務会長）に会いに行つたね。留守中の国内政局はどうなの
か、ということを聞きに行くんだが、善幸さんは「異常なことが起こるかも知れない。しかし、それ
はね、加藤君、あまりおどおどしないで、じつと待ちながら対応しよう」と、悠々としてるんです
ね。あつ、これは不信任可決とか解散とか、そこまで読んでるなあ、と思ひました。田中派とよく
相談してゐるのだな、と思ひました。

— いざとなつたら、やるということだったのですか。

加藤 まあ、あんまり、こつちから下手に出ていけない。（不信任案可決を）やるなら、やらせよ
うという考えだつた。

——その点は、大平さんと善幸さんとの間では、意思疎通がかなりあったんですか。

加藤　そこは分からないね。

——感じとしてはどうでしたか。

加藤　大平総理にとつては、不本意で、シナリオ通りじゃなかったと思いますよ。でも、私は善幸さんのその話を聞いていた。ただ、大平さんがどんなところで、どんなことをやっていたかは分からなかった。官房副長官というのは、当時めちゃくちゃに忙しかったんですよ、雑用で。いざ本会議になったら不信任案が出てきて、私は比較的冷静に本会議場に対応したんですけど。それができたのも、こういうことが起こり得るということを善幸さんから示唆を受けていたからだと思います。

——でも、大平さんは辛そうな顔をしていた。加藤さんは本会議場でメモを大平さんに持って行かれましたよね。

加藤　ええ。本会議場を出て自民党幹事長室に行つて、善幸さんと会つて、いろいろ情報を聞いて、「もう造反者を引き止めない、後は解散で行くという方針で、ということを経理に伝えてほしい。田中角栄さんも同じ意見だと伝えておいてくれ」と言うんで。私は席に戻つて、それから五分ほど知らん振りしてね。それから、やおらメモを書いてヒナ壇上に持つて行くことをしました。

——その経過は、ほとんどそのメモにきちつと書かれたんですか。

加藤　書きましたよ。

——大平さんは、どんな反応でしたか。

加藤　それは、「そっか」でした。

実

——「ウーム」という表情でしたか。

就

加藤 分かりませんね。後ろから渡して、すぐ自分の席に戻ったわけですから。

華

——その時には本会議場でいろんなドラマがあつて、安倍（晋太郎）さんが出て行く、最後は中曽根（康弘）さんが入ってこられる、というのがありましたけれども、あの辺の大平さんの気持ちは、どうだったんでしょうね。

加藤 安倍さんなんかを可愛がつていたから、辛かつたんでしょうね。

——そのまま信任案が可決されて解散になつて、衆参同日選挙、六月二二日投票。大平さんは参院選の公示日に演説されて、夕方お宅へ帰られて、そのまま夜、入院されるわけですが、その連絡は誰からきましたか。

加藤 たしか友人の政治部記者から電話で聞きました。その時、私は選挙区にいました。東京に連絡をとると、「大事をとつて虎の門病院で寝ている」と森田一秘書官が言っていた。

——倒れられてから、お亡くなりになるまでの期間は、大平さんと接触されたということは……。

加藤 ないですね。電話もなかった。ただ、竹下（登）大蔵大臣から私にベネチア・サミットに、ぜひ行くべきだという話があつた。「当選三回目の君は、投票の前日、前前日、選挙区を留守にするということは、代議士にとってはものすごく危険なことだが、取えてあんたはやつて、公務をやるべきではないか。ベネチアへ行け」と言うわけです。それで行く準備をし、それで……。

——亡くなられる直前に、総理が行くという意思表示をされ、その準備に佐藤（嘉恭）秘書官が羽田を発つて、向こうへ行つて調べるといふ、切符を取つて用意をした朝に亡くなられた……。

加藤 佐藤秘書官が現地の会場を見て、この椅子がどうだとか、スロープがどうだとか調べる段取りを相談していた。亡くなられた日の朝、私は鶴岡市駅前の魚市場にいたんです。そこで、行商人や魚市場の関係者に選挙をお願いしますと廻っていた。そこに私の選挙事務所から、大平さんが亡くなられた、という電話が入ってきた。六時半頃だったと思いますね。

——大平さんが亡くなられたということ聞いた時に、どんなお気持ちでしたか。

加藤 一つは「やっぱり」という感じだったね。かなりきついかなと思っていました。心臓病だから。非常に「えっ」というのと、しかし「まさか」というのと悲しい想いと。しかし考えてみれば、あれ、きつい病気だったはずだなあーと、いろいろないまぜでしたね。

——振り返ってみると大平さんの首相在任は一年と七カ月でした。結局、政争に明け暮れた日々でしたよね。その辺は側におられた立場からいうと、どういうふうに思っておられますか。何ができたのか、何が残ったとか……。

大平政治は責任政治の最たるもの

加藤 まあ、政治に責任をもって当たろうとしていた。例えば自分が、赤字公債を発行したのだから、自分がそれを戻さなければいけないと言って、(一般)消費税に行く。それから、自由主義諸国と外交をやっていると言うのであれば、それを「同盟」と言う。それから、皆な豊かになってきた時には、国民は何を次に求めるだろうか、ということを考え始める。保守政治の原点みたいなことを真

実 面目にやろうとして、それで緒についた時に亡くなった。その一番、最初の話は、(一般)消費税で
就 もめて、選挙をして負けて、もめてということですから、やっぱり大平政治は責任政治というか保守
華 政治 保守政治とは責任感のある政治という意味だと思っただけですが、その最たることをやり始
去 めた途端に亡くなった。でも、その責任感みたいなものが、重い重い印象として残っているから、い
までも大平正芳が語り継がれるところがあるんじゃないかと思えます。

——最後に、加藤さん自身が大平さんの後、鈴木善幸さん、宮澤喜一さんと続いてきた宏池会とい
う派閥を継承されたわけですが、派閥の領袖のあり方というふうなもので、大平さんから学んだ点、
あるいは、いまのご自分と比較して、どうかという点をお聞きしたい。

加藤 大平さんも私も、株式会社みたいに派閥を継承している社長であり、創業者社長じゃなくて、
後で組織の中から認められて上ってトップになった社長ですね。大平さんには戦う部分と、それから
(戦った)後、仲良くしていく部分が共存していたんじゃないでしょうかね、リーダーとしては。あ
と、政治家としては、大平さんは四十日抗争を戦いながら勝ったが、そのドラマの途中に、「加藤、
お前が去って、誰一人としていなくなっても、俺は頑張ってみせる。見てろ」と言っていた、あの言
葉、その意志の強さ、孤独の中でも耐えて頑張って行こうとする、最後の一人になっても俺は国を引
つ張るといふ、あの強さを自分で持てるかなというのが、まあ教訓ですね。

(平成二十二年二月一日、二二日 加藤事務所取材)

大平内閣の理想と実態

加藤紘一（かとう・こういち） 一九三九年、山形県生まれ。東大法学部卒、六四年外務省に入省、六七年香港総領事館副領事、六九年アジア局中国課次席事務官を経て、七二年衆議院議員に初当選。以来、七八年大平内閣の官房副長官、八四年中曽根内閣の防衛庁長官、九一年宮澤内閣の官房長官、九四年自民党政務調査会長、九五年幹事長を歴任して、九八年自民党宏池会会長に就任、現在にいたる。当選九回。大平正芳記念財団の理事。著書に『いま政治は何をすべきか』など。